

男声合唱組曲「富士山」をどう歌うか

タダタケさんの思い

加藤 良一 2025年2月26日

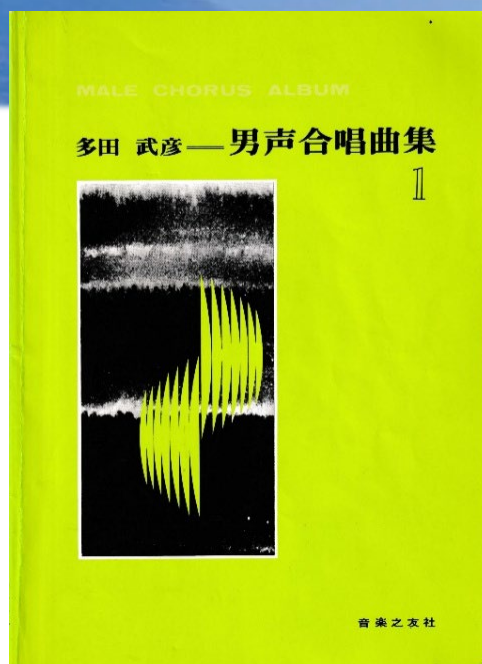
多田先生は、電話口でいつも歌いながら、ここはこうだと説明してくれる。たいへんよく理解できるが、それを文字に置き換えるのはなかなか容易なことではない。

（電話での話は1時間以上にわたることはめずらしくない。つねに通話録音を再生してメモを書きなおしている）

男声合唱プロジェクトYARO会第1回ジョイントコンサート(2003年11月23日)の直後、合同演奏・男声合唱組曲『富士山』について、多田先生から忌憚のないコメントを頂いた。電話でのやりとりだから、とくに気の付いたポイントのみというところであらうか。触れていない箇所は何もなかったということにはならないことを、申し添えておく。

多田先生のコメントはYARO会の演奏についてのものであるが、それはそのままこれから演奏しようという方々へのメッセージともなりうる。youtubeの演奏音源とともに読みいただけるとよい。

『富士山』は、全部で8巻ある＜多田武彦—男声合唱曲集＞の〔第1巻〕の最初に掲載されている。それほど自他ともに認める代表曲ということである。（この曲集は第6巻までは小節番号が付されていない。筆者が所持している楽譜はそうであるが、新しい版では追加されたであらうか。）



多田武彦先生のコメント

I. 作品第壹（第一） *Moderato*（中くらいの速さで）

18小節目から *meno mosso*（平均にゆっくりと）で入る「夢見るわたくしの富士の祭典」の部分では、トップテナーの柔らかく伸ばされた音に、セカンドテナーとバリトンが3連符の上行音階でメロディを乗せてゆく。この形はほかにも83小節と113小節に出てくるが、ここは草野心平の詩にもとづいて変化をつけてある大切な箇所である。しかし、それぞれの味わいのちがいを適切に表現してくれる人は多くない。その点、YARO会の演奏ではちがいがよく表現されていて作曲家としてはありがたい演奏だった。小高秀一先生はよく理解してくれている。



作品第壹（第一） <https://youtu.be/B5Y6kDQyo5w>

17 *meno mosso* *molto cresc.*

ゆめみる わたくしの ふじのさいてん

meno mosso *molto cresc.*

Andante [$\text{♩} = 76$]

83 *p*

ふじ わたくしの

p *mf*

113 *p*

ゆめみる わたくしの

mp *p*

Ⅱ. 作品第肆（第四） *Moderato*（中くらいの速さで）

この曲についてはYARO会の演奏は全体的に及第点である。とくに言うことはない。



作品第肆（第四） <https://youtu.be/FrURARd9-GY>

Ⅲ. 作品第拾陸（第十六） *Allegro vivace*（快活に速く活発に）

Andante（歩くような速さで）から *Moderato*（中くらいの速さで）に変わって42小節からはじまる「じょうてん きんくまどりの上天に 金限取の雲一点」は全部で4回繰り返されるが、大方の合唱団ではこの箇所ですつと騒いでしまう。騒ぐとは、つまり声を張り上げて歌ってしまうということ。

この部分は、黒富士の背景に夕陽が落ちてゆき、刻々と空の色が移ろってゆくさまが表現されている。元気よく歌ってしまつては、陽が落ちてゆく最後の輝きの叙情性が掻き消されてしまう。



作品第拾陸（第十六） <https://youtu.be/Ev45kmV0n6E>

40 *Moderato* [$\text{♩} = 96$]

じょうてん に きんくまどりの

mp *mf*

だんだん しずみ

その点YARO会の演奏は、富士の最後の輝きとでもいうべき「上天に金隈取の雲一点」が残る風景をみごとに歌っており、叙情性がよく出ていた。

IV. 作品第拾捌（第十八） *Allegretto con fuoco* (やや速く生きいきと)

この曲は組曲のなかでもっともむずかしい曲である。出だしの「まるで^{くれないいろ}紅色の狼煙^{のろし}のように」の部分は「語り」だから、あたかも謡曲のように語るべきところであり、軽やかにさらっと歌うところではない。



作品第拾捌（第十八） <https://youtu.be/aZIziug9Ndl>

1 *Allegretto con fuoco* [♩=112]

Ten. I. *mp* あゝ

Bar. Bass. *mp* あゝ

まるで *mf* くれなゐの のろしのように

続く13小節から「豊旗雲^{とよはたぐも}は満々と燃え その下にズーンと 黙^{もだ}す 黄銅色^{こうどうしよく}の大存在」で景色地形を説明している。

10 くれなゐの のろしのように 12 とよはたぐもは *f*

あゝ

14 まん まん ともえ 16 *f* そのしたに

ズーンともだす *f*

cresc.

そのあとに続く22小節「まぶしいぬるい光に浮かぶ^{かずかず}数数の」は、あたかも金管楽器のような輝き *brillante* をもって歌うようにパッと変らなければいけない箇所であるが、いまひとつその輝きが出ていなかった。さらに26小節からはじまる「豊旗雲のその下の 地軸につづく黄銅色」から最後にいたるまでがメロディであり、とうとうと歌う箇所となっている。

22 *brillante*
mp まぶしいぬるい ひかりにうかぶ
mf
brillante
mp
mf

25
 かずかずの とよはたぐもの そのしたの
f
f
 27

この曲はこれら四つの組み合わせで作ってあるが、残念ながらこれをマスターする合唱団はすくない。詩の読み込みが足りないからである。YARO会は、声はみなしっかりしていただけないことだ。

V. 作品第貳拾壹（第二十一 宇宙線富士） *Allegro assai*（非常に速く）

この曲は明るく歌ってよい。しかもあまりゆっくりでなく。冒頭の「平野すれすれ ^{あまぐもびょうぶ} 雨雲 屏風 おもたくとぎし」は *f* で速く *Allegro assai* と指示してある。あたかもチューバやトロンボーンが吹くように低いところからじょじょに高まってゆくと、音として面白いものとなるのだが、詩にとらわれ過ぎると終曲としての妙味がなくなる。ここを失敗する人はけっこう多い。合唱は詩と音楽の複合芸術だからどちらか一方に傾きすぎてもいけない。今回はやや詩に傾きすぎたきらいがある。



作品第貳拾壹（第二十一 宇宙線富士） <https://youtu.be/IyqPDVISUzc>

1 *Allegro assai* [♩ = 144] *lunga* *molto riten.*
 Ten. I. II. *f* *lunga* *p* *molto riten.*
 Bar. Bass.
 へいやすれすれ へいやすれすれ

5 *a tempo* *f* *lunga*
 あまぐもびょうぶ おもたくとぎし へいやすれすれ
mf *a tempo* *f* *lunga*

草野心平 作詩
 多田武彦 作曲

終曲はあまりにのっぴりやられると聴いているほうはいやになる。そこで終曲はストラビンスキー的に作ってあるのだが、YARO会の演奏は草野心平の詩に寄りかかり過ぎたと思う。

15小節から「その^{ぜったん}絶端に」を繰り返し、*ff* の「いきなりガツと」までゆき、ガラリと雰囲気を変えて「夕映えの富士」と宗教的な敬虔さを表してある。ここは一気に駆け下りる感じがよい。そこから40小節「降りそそぐそそぐ^{すいらん}翠藍^{だいしゅうう}ガラスの大驟雨」へ入るとエンディングが決まる。

15

lunga

mf accel.

その^ぜたんに その^ぜたんに その^ぜたんに

f *lunga* *p* *mf accel.*

21

ff a tempo

その^ぜたんに いきなりが と

ff a tempo

よく失敗する例として70～71小節「夕映えの富士」で *ritardando* (*rit.*) (だんだん遅く) してしまう箇所がある。YARO会はここで *poco rit.* (わずかに遅く) していた。むしろここはインテンポでもっていった、73小節「降りそそぐそそぐ」でちょっと遅くするだけでよい。そうでないと二重に遅くすることとなり、あとの意味がなくなる。指揮者や歌っている人は *ritardando* したくなるのかも知れないが、それでは音楽がダレてしまう。

70

Meno mosso [$\text{♩} = 104$]

molto espr.

と ゆうばえの ふ—— じ ふりそそぐそそぐ

f molto espr.

75

すいらんガラスの すいらんガラスのだ

80

す い ら ん ガ ラ ス の す い ら ん ガ ラ ス — の だ

87

rit. *Adagio* *ff*

い しゅう— う だ い— しゅう— う

rit. *ff*

*poco rit.*するのは、そのあとが駆け上がるような流れになっている場合が多い。ベートーヴェンの五番や九番の最後の様なケースがその例である。

(2003年12月21日 多田先生からの電話にて)

タダタケさんのサイン

男声合唱プロジェクトYARO会が『富士山』を演奏してから1か月後、多田先生から以上のような貴重なコメントを頂いた。良い点もあるが、改善を要する箇所も散見される演奏であった。しかし、この演奏は、全体を通して良い演奏であり、「保存版」としてよいのではないかとの総合評価であった。これから『富士山』に取り組む方々への参考になればさいわいである。



余談ではあるが、わたしは小節番号が書かれていない楽譜には自ら手書きで番号を記入している。たとえば、「20頁の上から3段目の3小節目は…」などといわれると困ることが起きるからだ。当たり前だが、出版社が異なれば譜面のレイアウトが変わり、前述のような話は通じないことがある。従って、「57小節は…」などはっきり小節番号で表現してほしいと願うものである。

Back

Home

音楽・合唱コーナーTOPへ

Topページへ戻る